

「あいな里山バイオパーク」は、日本環境教育学会関西支部の有志メンバーが中心となって、神戸市北区山田町藍那（あいな）にある里山をフィールドにして活動する市民グループです。この234ヘクタールの敷地はいま、国営明石海峡公園（神戸地区）として整備されつつあります。私たちのグループは、この都市近郊にあって押し寄せる開発の波の中で息づいている貴重な自然を再生し、都市に住む人たちが身近なところで自然体験のできる環境教育のフィールドづくりを目差し、あいな里山バイオパークづくりを提案します。

## 「あいな里山バイオパーク」でこれからしたいこと

### 藍那の里山を復元・保全しよう



里山は長い時間をかけて人間が自然に働きかけて作り上げてきた二次的自然です。藍那の里道や棚田、溜池や森林も人間が手をいれることによって維持されているのです。こうした里山を保全することは、日本の伝統文化を体験する機会であり、自然再生の技術を学ぶ場でもあります。「あいな里山バイオパーク」では、まず棚田を再生するところからはじめます。

### 藍那の里山でビオトープをつくろう



藍那には約20ヘクタールの棚田があり、また各所に180もの溜池が存在します。こうした棚田や溜池は、かつては農業の場所であると同時に、多様な水生植物、水生昆虫、野鳥、小動物など野生生物の宝庫でもありました。このような里山の自然を復元・保全しながら自然に親しみ、体験する場として、棚田を利用したビオトープをつくります。環境教育、ビオトープまた農業に関心のあるかたは、気軽にお声をかけてください。

## 不耕起移植栽培

あいな里山バイオパークでは「不耕起栽培」という方法を用いて圃場を復元します。岩澤信夫氏は、不耕起栽培の利点について次の七つの効果を挙げています。それは、1) イネが野生化して丈夫になり、病気や虫、冷害にも強くなる。2) 分けつが多く、太くて倒伏しない。しかも粒の大きな穂を実らせる。3) 土壌構造が物理的、生物的に変わって、おコメがおいしくなる。4) 耕さないので省労働、省エネルギー、省コスト。人にも環境にもやさしい。5) 冬季湛水との組み合わせで、抑草や肥料効率が向上する。6) 藻類が増え、酸素を吐き出し、水をきれいにし、最後には自然堆肥になる。7) 生き物が増え、田んぼ本来の環境が復元し、水を浄化する、のです。

## 冬季湛水

「冬季湛水」とは冬場に雑草の発育を抑制するため、また生き物の生きられる環境を整えるために水を貯めておくことです。岩澤氏によると「稲刈り後に生える草の多くは畑の草と性質が似ていて、酸素がないと発芽できず水の中では生育ができません。（略）しかし真冬でも、冬季湛水した田んぼの雪や氷の下では、たくさんの微小な生きものたちが活発に活動しています。寒い地域でも冬季湛水した田んぼでは有機物の分解を含めた自然循環が徐々に進んでおり、早春の水温上昇とともに、再びイトミミズの活動が高まるようです。」とされています。

## 無農薬・無化学肥料

農薬について岩澤氏は、次のように述べています。「農薬の多くはその原料に毒物や劇物に指定されている物質を含みますので、安全な農薬というものは本来存在しないのに、『安全性の高い農薬』を使うことを前提に農業が行われているのです。使用基準を守れば人間には害がないといいますが、過去に使用禁止となった農薬にも使用基準が厳然とありました。過去にも現在にも、化学的に合成された物質は、自然界に存在しなかったものなので、本当に農薬が安全かどうかの基準を設けること自体、数年間の試験で判断できるとは思えません。今も日本の田んぼは、イネつくりのために過去大量に投与された有機塩素系農薬と、毎年使用した除草剤によるダイオキシン、有機水銀の残留など多くの負の遺産を背負っているといわれています。」こうした理由からあいな里山バイオパークでは化学合成農薬や化学肥料を使いません。  
(岩澤信夫『不耕起でよみがえる』創森社より)

あいな里山バイオパーク（代表 赤尾整志 [日本環境教育学会関西支部世話人]）

連絡先：amano.masao@nifty.com（事務局・広報担当：天野雅夫）

ホームページ URL：http://www.kankyo.atnifty.com/~biopark/